

## 1. はじめに

格助詞「の」は、近代語における用法として連体修飾格、主格、準体格が指摘されるが、古代語における用法としては以上に加えて、同格、比喻も指摘される。「の」にそのような、時代的な変遷がある一方で、他の格助詞「が」「を」「へ」「に」「と」「より」「から」<sup>1)</sup>にはそれほど大きな変遷は見られない。「の」は変遷が著しいのだろうかと考え、「の」の本質<sup>2)</sup>を探ろうと発想する。

連体格、主格、準体格の3つの用法に注目すると、「の」の用法に時代的な変遷がないように見える。だが、源氏物語「若菜上」巻、「若菜下」巻における「の」の構文用法に注目し、主格のはたらきをする例文を分析すると、「の」があらわす主格には、2つの種類がある。その一方は単純な主述関係を持つ文で用いられ、もう一方はいわゆる、二重主語構文で用いられる。前者は古代語と近代語に共通するが、後者は近代語には見られない。格助詞「の」の本質を明らかにするための重要な事実である。

## 2. 先行研究

格助詞「の」の用法、機能を検討する先行研究に、山田(1913)、青木(1952)、漆崎(1987)、中川(1958)、久島(1987)、坂本(1971)、野村(1993a)、野村(1993b)、太田(2000)がある。以上の先行研究が、「の」の用法、機能を検討するためにとった方法は次のようである。山田(1913)、青木(1952)、漆崎(1987)は「の」の前後の語句について述べ、中川(1958)、久島(1987)はそれぞれ「の」の「原初的性格」、起源を述べ、坂本(1971)、野村(1993a)、太田(2000)は「の」の構文用法を論じている。日本語の研究には、品詞論と構文論の分類があることを考えると、構文論に分類できる「の」の先行研究は相対的に少ない。構文用法に触れる坂本(1971)、野村(1993a)、太田(2000)をとり上げる。

### 2. 1 「の」の同格用法についての研究

「の」の同格用法を論ずる先行研究として、坂本(1971)、太田(2000)をとり上げる。坂本(1971)は、〈体言+の…連体形〉という構文における「の」の用法を論ずる。文法ではこの構文の「の」を同格と呼ぶことがある。「同格」と呼ぶのは「の」に上接する語句、下接する語句が同じ対象について述べるという点からであるが、その同一対象に対する認識の違いが見られるため、この構文を同格と呼ぶことに、坂本(1971)は異議を唱える。

また、太田(2000)は、坂本(1971)と同じく、「の」の同格用法について論じている。同格を複数の語句が同じ人あるいは物を表しているものと捉えることに、太田(2000)は異議を唱える。『国語学辞典』の「同格」の解説<sup>3)</sup>を参考に、同格用法は、複数の語句が同

じ格に立つ用法のことだと述べ、格助詞「の」の表し得る格機能が主格と連体格であることに注目している。よって、「AのBに」、「AのBを」といった用例においては、「の」が「に」の連用格、「を」の補格を表せないため、たとえAとBが同一内容であっても同格とは言えない、と述べる。以上のように、「の」の上接語と下接語が同一事物を指しているときに「の」を同格と呼ぶという考え方に対し、坂本（1971）、太田（2000）による異議がある。

## 2. 2 「の」の主格用法についての研究

坂本、太田と同じく「の」の構文用法を論ずる野村（1993a）は、萬葉集に「の」の用例を求め、主格の用法に注目する。主格のはたらきをする「の」のなかでも、「総主・小主」構文をとり上げている。次の、萬葉集 822 番歌を「総主・小主」構文の例だと捉えている。

### [資料 1]

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るかも<sup>4)</sup>

資料 1 の和歌の下線部を、野村が「総主・小主」構文の 1 例だと捉えるのは解釈においてである。下の句である下線部について、「前句よりして『それは』と解釈し得る」<sup>5)</sup>と述べ、「総主・小主」構文だと捉えている。そして野村（1993a）は、「の」と同じく主格として機能する助詞「は」や無助詞を比較の対象として、「の」は「総主・小主」構文のなかで主格として機能するということを指摘する。そして、「の」は、「原始的に修飾語たることによって被修飾語と強く一体化する」<sup>6)</sup>と述べる。

以上のように、坂本（1971）、野村（1993a）、太田（2000）は「の」の構文用法をとり上げ、なかでも坂本（1971）、太田（2000）は「の」の同格用法に、野村（1993a）は「の」が「総主・小主」構文で用いられることに注目する。

## 3. 資料について

### 3. 1 資料の選定

格助詞「の」の用法、機能を検討する際に、先行研究がどのような資料に用例を求めてきたのかを見ていく。前章の研究をとり上げる。「の」の成立、起源について論じたり、本論文のように「本質」について論じたりするのであれば、格助詞「の」の用例をなるべく古い時代に成立した言語資料、すなわち古事記、日本書紀、萬葉集などの上代語の資料に求めるのが妥当だと考えられる。実際、山田（1913）、青木（1952）、中川（1958）、久島（1987）、野村（1993a）、野村（1993b）では、その用例の大半が古事記、日本書紀、萬葉集である。中川（1985）は用例の一部に源氏物語、伊勢集を用いているが、やはり大半は上代語の資料である。また、漆崎（1987）は宇治拾遺物語に、坂本（1971）は時代を問わず伊勢物語や徒然草などに、太田（2000）は上代の資料として萬葉集、中古の資料として源氏物語、

伊勢物語に用例を求めている。上代の言語資料以外に「の」の用法を求める先行研究がほとんどであり、それ以降の言語資料を用いる例は相対的に少ない。

以上のように、先行研究の大半がその用例を古事記、日本書紀、萬葉集に求めている。しかし、「本質」を求めるのであれば、それだけでは不十分である。上代語の資料に加え、それ以降の時代に成立した言語資料を用いる必要がある。平安時代以降の言語資料として、源氏物語に「の」の用例を求め、その分析を行っていく。

### 3. 2 源氏物語の「の」の用例

源氏物語には、主格としてはたらく「の」の用例がある<sup>7)</sup>。資料2にその例を示す。

#### [資料2]

1. 赤き紙の映るばかり色深きに、 (①紅葉賀 337 ページ)
2. 院の思しのたまはせし御心を、 (②須磨 197 ページ)
3. 女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、 (③少女 27 ページ)

資料2の用例1、用例2、用例3のなかで下線を付した「の」が主格として機能している。用例1は「赤き紙」が主語、「色深き」が述語、用例2は「院」が主語、「思しのたまはせし」が述語、用例3は「女」が主語、「え知らぬ」が述語となる。なお、用例1は、「色深き」が述語であるが、その述語のなかでも主述関係があり、「色」が主語、「深き」が述語となっている。用例2、用例3と比べて、その構造は複雑である。源氏物語は、用例2、用例3のように、単純な主述関係をもつ構文で「の」が用いられる場合と、述語のなかに主述関係をもつ構文で「の」が用いられる場合がある<sup>8)</sup>。

### 4. 主格助詞「の」の用例の分析

#### 4. 1 主格助詞「の」の用例の2分類

源氏物語のなかでも、「若菜上」巻、「若菜下」巻に、主格としてはたらく「の」の用例を求める<sup>9)</sup>。すると「若菜上」巻からは138件、「若菜下」巻からは164件、合計302件の「の」の用例があった。その302件を、大きく2つに分類した。1つは単純に主述関係を持つ用例であり、もう1つは述語のなかに主述関係を持つ用例である。

#### [資料3]

1. 後の宮のおはしましつるほどは、 (④若菜上 17 ページ)
2. 次々の子のおぼえのまさるなめりかし。 (④若菜上 26 ページ)
3. 人の、ただこの世経る方の心おきてこそ少なかりけれ。 (④若菜上 128 ページ)
4. 御なまめき姿のいますこしにほひ加はりて、 (④若菜下 192 ページ)
5. 年を経て思ひわたりけることの、たまさかに本意かなひて、 (④若菜下 253 ページ)

資料3の用例1、用例2は、単純な主述関係を持っている。すなわち、用例1は「後の宮」が主語、「おはしましつる」が述語であり、用例2は「次々の子のおぼえ」が主語、「まさるなめりかし」が述語である。用例1、用例2はそれぞれ「後の宮がいらっしやった間は、」、「代々の子の世評がまさるものらしいよ」という現代語訳になる。また、資料3の用例3、用例4、用例5は、「の」が主格として機能しているが、次に記すように用例1、用例2と異なる。用例3は、「人」が主語、「ただこの世経る方の心おきてこそ少なりけれ」が述語であり、その述語内に主述関係がある。すなわち、「ただこの世経る方の心おきて」が主語、「少なりけれ」が述語になる。次に、用例4は、「御なまめき姿」が主語、「にほひ加はり」が述語で、その述語内で「にほひ」が主語、「加はり」が述語となっている。さらに、用例5も、「年を経て思ひわたりけること」が主語、「たまさかに本意かなひ」が述語で、その述語内で「本意」が主語、「かなひ」が述語となっている。用例3、用例4、用例5のように、述語内に主述関係のある2つの語句が含まれる用例がある。この構文を、「総主総述・副主副述」構文<sup>10)</sup>と命名する。

「総述」は、主述関係にある2つの語・句が1つの節になっていて、それを述語にした主語が存在する場合、その節のことを指す。そして、その節に対する主語が「総主」であり、「総述」中で主述関係を持つ2つの語・句のうち、主語になるものが「副主」、述語になるものが「副述」である。資料2の用例で具体的に示すと、用例3は、「人」が「総主」、「ただこの世経る方の心おきてこそ少なりけれ」が「総述」、「この世経る方の心おきて」が「副主」で、「少なりけれ」が「副述」である。次に図式化して示す。

[図1]

3' 人の、ただこの世経る方の心おきてこそ少なりけれ。

図1では、小さな枠内「この世経る方の心おきてこそ少なりけれ」が「総述」、そのなかで「この世経る方の心おきて」と「少なりけれ」が主述関係を持つ。そして、大きな枠内では、「人」と「ただこの世経る方の心おきてこそ少なりけれ」が主述関係を持っている。また、用例4は、「御なまめき姿」が「総主」、「にほひ加はり」が「総述」、「にほひ」が「副主」、「加はり」が「副述」となり、用例5は、「年を経て思ひわたりけること」が「総主」、「たまさかに本意かなひ」が「総述」、「本意」が「副主」、「かなひ」が「副述」となる。

以上のように、源氏物語「若菜上」巻、「若菜下」巻に見られる主格の「の」は合計で302件あり、そのうち287件は単純な主述関係を持つ構文で、15件が「総主総述・副主副述」構文に分類できる。

#### 4. 2 述語に用いられる語の品詞

前節1では、「若菜上」巻、「若菜下」巻に見られ、主格として機能する「の」の用例を、2つに分類した。これは、「の」の構文用法に注目し、主格として機能する「の」に焦点をあてた結果である。主格としてはたらく「の」に注目するかぎりは、述語にも注目する必要が出て来る。それは、主語というのは、述語との関係が無視されてはならないからである<sup>11)</sup>。よって、302件の「の」の用例において、前節1で行った分類に加え、どのような語・句が述語となり得るのかを見ていき、述語の品詞によって分類する。まず、資料2の用例1、用例2が該当する構文、すなわち単純に主述関係を持つ構文について分類する。

[表 1]<sup>12)</sup>

品詞	件数
形容詞	60
形容動詞	26
動詞（自動詞）	116
動詞（他動詞）	78
名詞	5
助動詞	2

「若菜上」巻、「若菜下」巻から抽出した、計302件の主格の「の」のうち、単純に主述関係を持つ構文は287件だが、形容詞、形容動詞、動詞が述語になるという例が圧倒的であり、280件である。形容動詞が述語となる例が、形容詞と動詞が述語となる例に比べると少ないが、これは形容動詞そのものの語数が、形容詞と動詞に比べて少ないという点に起因するものと考えられる。

次に、資料2の用例3、用例4、用例5が該当する、「総主総述・副主副述」構文の副述を調べる。どのような語・句が述語となり得るかを見ていき、表1と同様に、品詞によって分類すると次のようになった。

[表 2]<sup>13)</sup>

品詞	件数
形容詞	7
形容動詞	1
動詞（自動詞）	7

表に示すように、計15件の「総主総述・副主副述」構文のうち、7件は形容詞、1件は形容動詞、7件は動詞（自動詞）が述語である。単純に主述関係を持つ構文の例が287件

であるのに対し、「総主総述・副主副述」構文の例が 15 件で少ないという点は考慮する必要があるだろう。しかし、その 15 件すべての副述が形容詞、形容動詞、動詞（自動詞）のいずれかであり、動詞（他動詞）、名詞が副述になる例が 1 件もないという点は注目せねばならない。

全 15 件に用いられる副述にはどんな語・句があるかを調査するため、用例を列挙する。

[資料 3]<sup>14)</sup>

1. 人の、とりたてたる御後見もおはせず、 (④若菜上 17～18 ページ)
2. かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、 (④若菜上 102 ページ)
3. 人の、ただこの世経る方の心おきてこそ少なかりけれ。 (④若菜上 127～128 ページ)
4. 紫の御用意、気色の、ここの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるどころなく、 (④若菜上 134 ページ)
5. 舞人は、衛府の次将ども、容貌きよげに丈だち等しきかぎりを選らせたまふ。 (④若菜下 169 ページ)
6. 陪従も、石清水、賀茂の臨時の祭などに召す人々の、道々のことにすぐれたるかぎりをととのへさせたまへり。 (④若菜下 169 ページ)
7. 朱雀院の、今はむげに世近くなりぬる心地して (④若菜下 179 ページ)
8. 御なまめき姿のいますこしにほひ加はりて、 (④若菜下 192 ページ)
9. よく咲きこぼれたる藤の花の、夏にかかりてかたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞしたまへる。 (④若菜下 192 ページ)
10. ものの、はえありてまさるところなる。 (④若菜下 196 ページ)
11. 御琴の音の出でばえしたりし (④若菜下 205 ページ)
12. 女二の宮の、なかなかうしろやすく、行く末長きさまにてもものしたまふなること、 (④若菜下 218～219 ページ)
13. ことの、たまさかに本意かなひて、 (④若菜下 253 ページ)
14. ただ事のさまの、誰も誰も、いと思ひやりなきこそいと罪ゆるしがたけれ、 (④若菜下 274～275 ページ)
15. 御鼻の色づくまでしほたれたまふ。 (④若菜下 280 ページ)

資料 3 の 15 の例文が、「若菜上」巻、「若菜下」巻で主格としてはたらく「の」を含む「総主総述・副主副述」構文である。用いられる副述は順に、「おはせず」、「深く」、「少なかりけれ」、「なく」、「きよげに」、「すぐれたる」、「し」、「加はり」、「なき」、「あり」、「し」、「長き」、「かなひ」、「なき」、「づく」である。このように、「総主」に「の」が下接する「総主総述・副主副述」構文では、「副述」に形容詞、形容動詞、自動詞が用いられる。

このように、「の」は「総主総述・副主副述」構文中の「総主」に下接する。前々章 2 で

述べたように、野村(1993a)も、萬葉集の用例のなかから同構文に注目し、そのなかで「の」が用いられることを指摘している。だが、資料1にとり上げた萬葉集822番歌の下線部を、「総主・小主」構文と捉えるのは問題である。解釈上は、「それは、天から雪が流れて来るのだろうか」となるのは確かだが、解釈を示したうえで述べたとしてもそれはあくまで解釈について論じているに過ぎない。822番歌の本文には、解釈でいう「それは」の部分がない。しかし、「若菜上」巻、「若菜下」巻の調査からは、「の」は「総主総述・副主副述」構文の「総主」に下接する用例を抽出することができた。したがって、「の」は「総主」に下接する用法を持つのである。

## 5. おわりに

格助詞「の」の構文用法に注目し、その本質を明らかにしようとしている。すると、主格や同格の用法に注目する必要がある。坂本(1971)、太田(2000)は同格用法をとり上げ、野村(1993a)は主格用法をとり上げた。本研究は主格用法に注目している。

主格について論ずるには、述語についての議論を欠かすことができない。管見においては、「の」の主格用法を論ずる際に述語について議論する先行研究がない。源氏物語の「若菜上」巻、「若菜下」巻から主格用法の「の」の用例を抽出したところ、「の」は単純な主述関係を持つ構文における主格を表わすだけでなく、「総主総述・副主副述」構文の「総主」に下接することがわかった。述語について調査すると、単純な主述関係を持つ構文では形容詞、形容動詞、自動詞、他動詞、名詞、助動詞が述語になることがわかった。だが、近代語には見られない、「の」を用いた「総主総述・副主副述」構文における「副述」を調査したところ、いずれも形容詞、形容動詞、自動詞であり、他動詞、名詞が「副述」になる例はなかった。そこから、「の」が「総主総述・副主副述」構文で用いられるときには、形容詞、形容動詞、自動詞を「副述」にとることが明らかになった。

形容詞、形容動詞、自動詞を「副述」にとる「総主総述・副主副述」構文の「総主」に「の」が下接する用例がある。その「の」が主格として機能しているのは紛れもないことだが、それは近代語には見られない用法である。そしてその構文で用いられる述語は、形容詞、形容動詞、自動詞に限られる。これらは、格助詞「の」の本質、つまり、歴史的変遷を経てもなお変わらずに残っている要素を明らかにするためには、重要な事実である。以上から、格助詞「の」の構文用法、とくに主格の用法について、より細かな分類、述語との関連を考慮に入れながら見直されるべきであるということを結論とする。

## 注

- 1) 橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店によれば、格助詞に分類されるのは「の」「が」「を」「へ」「に」「と」「より」「から」「で」である。「で」を除く8語が古代語、近代語ともに用いられる。

- 2) 下中弘編 (1971) 『哲学事典』平凡社 (1318～1319 ページ) の解説を参考にし、「本質」を、「歴史的変遷を経てもなお変わらずに残っている要素」と定義する。
- 3) 国語学会ほか編 (1955) 『国語学辞典』東京堂出版、144 ページには同格の解説がある。次に挙げるのは「格」の解説の一部であり、関本至の執筆である。  
 なお同格 (apposition) と言われるものがある。しかし、それらは形態上同一の格の並置であるにしても、実際上は、一方が他方を補足説明する立場にある。
- 4) 小島憲之ほか校注・訳 (1995) 『新編日本古典文学全集 萬葉集②』小学館、43 ページ。
- 5) 野村剛史 (1993a) 「上代語のノとガについて (上)」(京都大学文学部国語国文学研究室編『國語國文』62-2、中央図書出版社、13 ページ)
- 6) 注 4) に同じ。14 ページ。
- 7) 阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語①～⑥』小学館を用いて、サンプリング調査を行った。10 ページに 1 ページの割合で、用法を問わず、「の」を抽出したところ、2,001 件であった。そのなかで主格として機能するのは 338 件である。資料 2 には、その例を列挙した。
- 8) 源氏物語を用いたサンプリング調査を行い、単純な主述関係をもつ構文として、次の用例がある。
1. 涙のこぼるるを、 (④御法 517 ページ)
  2. 声の、いみじくらうたげなるかなと、 (⑤宿木 427 ページ)
  3. 客人のおはするほどの、御旅居見苦しと、 (⑥東屋 67 ページ)
- 用例 1 は、「涙」が主語、「こぼるる」が述語、用例 2 は、「声」が主語、「いみじくらうたげなるかな」が述語、用例 3 は、「客人」が主語、「おはする」が述語である。単純な主述関係とは、もう一方の、述語のなかに主述関係をもつという、複雑な構造を持っている構文と対比しての関係を指す。「の」の上接語である主語と、その述語をとり出し、そこに 1 組だけの主述関係が認められる場合を指して、単純な主述関係としている。
- 9) 連体格助詞「の」との比較対象を求めて、同じく連体修飾格の用法が指摘される「が」の用例を同資料から抽出した。すると「が」の全用例が 77 件であったが、これは「の」の全用例が 2,549 件だったのと比べると圧倒的に少なく、「の」の比較対象として「が」を選択しないことにした。よって、連体修飾格としての「の」の分析を行わず、主格としての「の」の分析を行うことにした。主格として機能するのは「の」以外にも「が」、無助詞がある。「が」が主格として機能するのは 12 件で少ないが、無助詞が主格として機能するのは 577 件であり、主格助詞「の」の比較の対象としては申し分なさそうである。
- 10) 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』宝文館は、同構文を、「本主格」、「副主格」という語を用い、佐久間鼎 (1943) 『日本語の言語理論的研究』三省堂は、「本主語」、「副

主語」という語を用いて解説している。これらを参考にして、「総主総述・副主副述」構文という命名を行った。

- 11) 山口秋穂・秋本守英編 (2001)『日本語文法大辞典』明治書院、341 ページには「主格」の解説があり、次のようである。「主格」の項目は秋本守英の執筆である。

主格 しゅかく 格の一つ。Subjective case の訳語。文で説述されている事柄の主体であるという関係。主語がその述語に対して立つ文法的関係。屈折語では主格であることを語形で示すが、日本語では名詞に格助詞「が」(節の中では「の」も)を付けてその名詞が主格に立つことを示すのが普通である。ただ、「が」や「の」が付いていなくても副助詞や係助詞が付いていても主格に立つことはできる。

解説にある、「文で説述されている事柄」とは述語を指すものと考えられ、その「主体であるという関係」が「主格」なのである。

- 12) 品詞の分類は、中田祝夫ほか編 (1983)『古語大辞典』小学館の解説を参考にした。なお、述語の品詞として助動詞が 2 件あるが、いずれも「ごとし」である。小田勝 (2007)『古代日本語文法』おうふう、55 ページは、「助詞を受けたり」、「語幹が単独で用いられれたりする」という用例から、「ごとし」を「形式形容詞とみ」ているが、本研究は『古語大辞典』にしたがって「助動詞」とする。

- 13) 注 9)に同じく、品詞の分類は、『古語大辞典』の解説を参考にした。

- 14) 阿部秋生ほか校注・訳 (1996)『新編日本古典文学全集 源氏物語④』小学館より引用した。括弧内には新編全集巻数、巻名、ページ数を注記した。

## 参考文献

- 青木伶子 (1952)「奈良時代に於ける連体助詞『ガ』『ノ』の差異について」(東京大学国語国文学会編『國語と國文學』昭和 27 年 7 月號、至文堂)
- 漆崎正人 (1987)「格助詞『の』『が』の尊卑による使い分けに関する一考察—『今昔物語集』の“サタガ”と『宇治拾遺物語』の“さたの”、“さたが”をめぐって—」(藤女子大学藤女子短期大学国語国文学会『藤女子大学国文学雑誌』38)
- 太田靖子 (2000)「同格とされる格助詞『の・が』～その意味・用法について～」(京都女子大学国文学会編『女子大國文』127)
- 久島茂 (1987)「助詞『の』の起源について」(津田塾大学紀要編集委員会編『津田塾大学紀要』19)
- 小泉保 (2007)『日本語の格と文型—結合価理論にもとづく新提案』大修館書店
- 坂本元太郎 (1971)「連体格助詞『の』の周辺—<体言+の…連体形>の構文における『の』の問題点—」(『札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀要』2)
- 佐久間鼎 (1943)『日本語の言語理論的研究』三省堂
- 中川浩文 (1958)「助詞『の』『が』『つ』の原初的性格について—助詞の成立事情に関

- する一、二の考察一」(京都女子大学国文学会編『女子大國文』10、(1985)『中川浩  
文論文集〈上巻〉竹取物語の国語学的研究』思文閣所収)
- 野村剛史(1993a)「上代語のノとガについて(上)」(京都大学文学部国語国文学研究室  
編『國語國文』62—2、中央図書出版社)
- (1993b)「上代語のノとガについて(下)」(京都大学文学部国語国文学研究室  
編『國語國文』62—3、中央図書出版社)
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版
- 山内啓介(2008)「日本語助辞『は』の本質」(愛知淑徳大学言語コミュニケーション学  
会編『言語文化』16)
- (2009)「日本語助辞『は』の職能」(『愛知淑徳大学論集—グローバルカルチャ  
ー・コミュニケーション研究科篇—』1)
- 山田孝雄(1913)『奈良朝文法史』宝文館
- (1922)『日本口語法講義』宝文館